

Blitzen Times

September.2025
Vol.95



Race Report

- 8.30 グラベルやくらい
- 8.31 シマノ鈴鹿ロードレースクラシック
- 9.07 新城ロードレース
- 9.15 南魚沼ロードレース
- 9.17 宇都宮ジャパンカップ記者発表



沢田時、初挑戦グラベルで 圧巻の独走優勝

8月30日、宮城県加美町で開催された「グラベルクラシックやくらい2025」に宇都宮ブリッツェンの沢田時が初出場。難コースと悪天候をもとめず、終盤独走で優勝。MTB技術を活かした走りでも2位以下に大差をつける快挙を成し遂げた。

8月30日、宮城県加美町・陶芸の里スポーツ公園を舞台に開催されたグラベルレース「グラベルクラシックやくらい2025」に、宇都宮ブリッツェンの沢田時選手が初出場し、圧倒的な独走で見事に優勝を飾った。

※グラベル(Gravel)とは、英語で「砂利」や「砂利道」を意味する言葉で、特にモータースポーツや自転車の分野では「未舗装路」全般を指します。舗装されていない砂利道(グラベル)を主として走行するグラベルバイクを使った長距離オフロードレースです。

レースは全長100キロ、獲得標高2,442メートル、グラベル区間の割合が62%という、タフなコースで行われた。朝6時30分、穏やかなパレード走行の後にリアルスタートが切られると、すぐに動きが。沢田選手は織田聖選手(弱虫ペダルサイクリングチーム)、阿部嵩之選手(ヴェロリアン松山)と共に先頭集団を形成し、レース序盤から主導権を握る展開となった。

勝負所は終盤70キロ地点の登りのグラベル区間。ここで沢田選手が果敢なアタックを仕掛けると、一気に他2名を置き去りにして単独先頭に。そこから残り約40キロは独走。徐々に強まる雨で路面状況が大きく変化する中でも、持ち前のMTBで培った高度なテクニックを発揮し、安定した走りの後続を引き続けた。最終的には2位の織田選手に約7分、3位の阿部選手にはさらに差をつけてフィニッシュ。

レースを終えた沢田選手は「初めてのグラベルレースで優勝できてとても嬉しく思います。雨で視界や路面状況も厳しかったですが、MTBでの経験が活かしたレースでした。これからもグラベルレースで経験を積み、ロードやシクロクロスにも活かしたいです」と語り、多くの応援への感謝と今後の決意を述べた。

厳しいコンディションを乗り越え、圧倒的なパフォーマンスを見せた沢田時選手。宇都宮ブリッツェンの新たな挑戦に、大きな注目が集まった大会となった。



岡篤志、猛暑と激闘制し 鈴鹿で2位

8月31日、真夏の鈴鹿サーキットで行われたシマノ鈴鹿ロードレースクラシック。宇都宮ブリッツェンは復帰戦選手も加え全力挑戦。岡篤志が終盤の追撃で2位入賞を果たし、チーム力で存在感を示した。



8月31日、三重県の鈴鹿サーキットで「第40回シマノ鈴鹿ロードレースクラシック」が開催され、宇都宮ブリッツェンは岡篤志、谷順成、フロン・チュンカイ、小野寺玲、武山晃輔、花田聖誠、菅野蒼羅、阿藤来夢の8名体制で参戦した。夏の自転車祭典として知られるこの大会は、多くのファンが詰めかけ、エリート男子カテゴリーの戦いに熱い視線が注がれた。

今大会は、難病や怪我からの復帰を果たした選手が多かったのも特徴だ。小野寺は再生不良性貧血からこの大会で実戦復帰。菅野と阿藤も膝や鎖骨の怪我から復帰戦となった。なお、昨年2位の沢田時は前日のダブルレース出場のために今大会は欠場している。



スタートは真夏の12時過ぎ、気温は37度を記録する過酷な環境。その中で、レース序盤からシマノレーシングチームが主導権を握る展開となる。3周目には谷と武山が10数名の逃げ集団に加わり、集団とは1分差の攻防が続いた。徐々に逃げ集団のメンバーは絞られ、終盤には谷と武山を含む7名がリードを保つ形に。背後からはメイン集団も激しい追走を見せる。

最終周回、岡が集団を飛び出し追撃グループを構築。そのまま前方に追いつき、激しい争いとなる中で、シマノレーシングが人数の優位を確立。ラストは中井唯晶（シマノ）が集団スプリントを制し2連覇を達成。岡は惜しくも2位となったが、スプリントで実力を発揮した。

岡は「チームがしっかりと動き、自分も勝負できたのは成果」とコメント。今後の上りコースでの戦いにも手応えを感じている。チーム一丸で挑んだ暑さと戦術のレース、後半戦の勢いを感じさせる一戦となった。



また、復帰戦となった小野寺もトップと19秒差の33位で完走。ハードなトレーニング再開が難しい状態ながらも、粘り強くゴールした姿に多くの声援が集まった。

厳戦の新城ロード、 岡篤志4位健闘

9月7日、Jプロツアー第9戦「新城ロードレース」は山岳中心の過酷なコースで開催。宇都宮ブリッツェンは岡篤志が4位、谷順成が5位、武山晃輔が7位と複数名が上位に入り、強さを示す。

9月7日、Jプロツアー第9戦「新城ロードレース」は山岳中心の過酷なコースで開催。宇都宮ブリッツェンは岡篤志、谷順成、フオン・チュンカイ、沢田時、武山晃輔、花田聖誠が挑んだ。今大会は来年のアジア大会予選大会も兼ねてコースが新たに選定され、登坂コースを含む厳しい設定。事前試走で万全を期し、本番に臨んだ。

コースは計94・8キロ、メインレース区間は5周回。スタート&フィニッシュ地点では地域イベントとして様々な展示もあり、多くの市民に応援されながら、午前10時正にレースはスタート。パレード走行後、山岳区間でレースは早くも動きを見せた。1周目の登りで岡・Jプロツアー個人首位の金子宗平（群馬グリフィン）、帰国直後の橋川丈（愛三工業）の3名が抜け出す形に。続いて谷と武山も一時合流し、少人数でのサバイバルな展開が続いた。

3周目には岡と谷、金子、橋川が先行し、後方から武山が追う形。谷は単独アタックに一時成功したが、厳しい登坂区間で集団に吸収されてしまう。終盤の4周目には金子選手の強さが際立ち、主要4名で最終周回へ。

最後の勝負どころ、急坂で金子選手とベンジャミン・ダイボール（ウィクトワール広島）が抜け、橋川、岡

が続く。岡も序盤から勝負の展開を作ったが、最終周でペース配分に苦戦し4位に。谷は5位、武山も7位と複数名がトップ10入りし、チームの総合力の高さを見せつけた。完走者が30名と狭き門となる中、5名がリザルト入り。

レース後、岡は「一時は表彰台確実と思ったが、力及ばず。チームは良い形なので次戦で必ず勝ちたい」と語った。坂と荒れた路面を乗り越え、ブリッツェンは今後のJプロツアーでも更なる飛躍を誓った。



輪翔旗奪還！ 南魚沼ロードで団体優勝

9月15日、新潟県南魚沼市でJプロツアー第10戦「南魚沼ロードレース」が開催され、宇都宮ブリッツェンは激戦の末、経済産業大臣旗ロードチャンピオンシップで団体優勝を達成。チーム丸の戦いで悲願の輪翔旗を手にし、Jプロツアーチームランキング首位をほぼ確実なものとした。

Jプロツアー後半戦2戦目となる南魚沼ロードレースが、三国川ダム周回特設コースで開催。全12周・144キロのハードなコースには115名が出走し、来季全日本選手権の舞台としても注目された戦いとなった。

今大会のポイントには、1位と2位のポイント差が大きい「ブラチナ」レーティングと、チームで競う経済産業大臣旗（輪翔旗）争い。今年3連覇中の強豪を止め、宇都宮に輪翔旗を持ち帰ることが最重要目標となった。

ブリッツェンは、コロンビアから合流したルーベン・アコスタのほか、強力な主力選手と若手で挑む体制。レースはスタート直後から落ち着いた展開で進んだが、4周目に谷順成が含まれる7名の逃げグループが形成。集団との差を最大3分35秒まで広げる中、冷静なチーム戦略で状況を見守る。後半は集団が活性化し、次第に差が縮小。終盤で武山・アコスタが追走グループに入り、12周目を迎える頃には谷、武山、アコスタの3名が先頭集団に揃い、団体戦優勝への布陣が整った。

残り4キロで逃げる選手をアコスタがパスし、最後は群馬グリフィン林原選手と2名による激しいスプリントに。惜しくも2位でフィニッシュしたが、武山が4位、谷が5位と健闘し、輪翔旗を勝ち取った。岡篤志は個人ランキング上位ライバルのマークに合い13位となった

が、全員で勝ち取った団体優勝といえる内容だった。

レース後、谷は「チームとして勝ち取った団体優勝が何よりうれしい」と語り、アコスタは「最後まで粘ったが2位、でも次戦への手応えは十分」とコメント。鈴木監督も「この一年でチーム全体の力がついてきた。ランキング1位も確実になった」とチーム力の成長を強調した。

最後は全員で表彰台に上がり、真っ赤な輪翔旗を手に歓喜の瞬間。チームの総合力でつかった優勝となった。





宇都宮ジャパンカップ.. 宇都宮ブリッツェンが挑む 歓喜の舞台

宇都宮ジャパンカップサイクルロードレースが間もなく開幕。世界有数のトップチームとスター選手が集つ中、地元「宇都宮ブリッツェン」は新体制と特別シャージで戦いに挑む。地域の誇りを胸に、熱狂と感動のレースが宇都宮で繰り広げられる。

9月17日、東京・渋谷のSUBARU STARS SQUAREで宇都宮ジャパンカップサイクルロードレースの公式記者発表会が盛大に開催された。UCIワールドチーム6チーム、プロチーム、ナショナルチームを含む18の国内外強豪チームが宇都宮に集結し、1年に1度の熱戦が間近に迫っていることが改めて示された。

昨年大会を制したEFエデュケーション・イージーポストのニールソン・パウレスをはじめ、東京五輪チームパシユート金メダリストのジョナタン・ミラン（リドル・トレック）、マイケル・マシユース（チーム・ジェイコ・アルウラー）など、名実ともに世界トップクラスの顔ぶれが揃う。

2026年からのワールドツアーライセンス残留を懸け、激しいポイント争いが繰り広げられる今季は、単なるレースの域を超えた戦略的なチーム戦も見どころだ。

そんな世界の強豪を迎え撃つのが、地元宇都宮の誇り「宇都宮ブリッツェン」。2025年はAstemo株式会社とのパートナーシップを開始し、ホームレース



に向けて新たな力を注いでいる。チーム代表の廣瀬佳正GMは、「宇都宮の応援に感謝し、その声援に応える走りを約束する」と意気込みを語り、鈴木真理監督は「選手全員が一丸となり、ホームの舞台で最高のパフォーマンスを見せたい」とチームの団結力を強調。キャプテン谷順成選手も「地域のファンの前で全力を尽くす」と意欲を見せた。

宇都宮ブリッツェンは過去数年間で確実な実力アップを果たし、国内のJプロツアーでは屈指の強豪として君臨してきた。2025年も、谷順成をはじめ岡篤志やルーベン・アコスタ、沢田時ら実力派選手が勢揃い。若手の育成にも力を入れており、厚みのある選手層で国内外のレースに挑む姿勢は、地域ファンから厚い支持を受けている。

2025年の宇都宮ジャパンカップは昨年までの激戦からさらに一段と盛り上がる事が予想される。リドル・トレックの連覇にストップをかけるため、各チームが熱い戦いを繰り広げる中、ホストチームの宇都宮ブリッツェンも地元開催レースでの勝利と躍進を心から目指し、力強く走る覚悟だ。

ジャパンカップのコースは市街地のクリテリウムと古賀志林道の登坂を織り交ぜたテクニカルで過酷なコース。特に古賀志の登りは選手の総合力を問う難所であり、一瞬たりとも気が抜けない。観戦者は間近で疾走する選手たちの真剣勝負を体感でき、緊張と興奮に満ちた特別な時間を楽しめるだろう。

谷順成選手は「ジャパンカップは地域のみならずと選手が一体になれる最高のイベント。ファンの応援が力になる。今年も全力で走る姿を見てほしい」と、地元開催レースの意義とファンへの感謝を強調。鈴木真理監督も「地元の声援が選手の挑戦心に火をつけている。今回も最高のチーム力で挑む」と期待を込める。

レース期間中は地元宇都宮の活気あふれるお祭りのような雰囲気も魅力。地域の飲食店やショップが連携したファンサービスやイベントが開催され、家族連れからサイクリングファンまで誰もが参加しやすい環境が整っているのも大きな魅力だ。



記事の後半では、ユニークなチームの象徴とも言える特別ジャージに触れておきたい。宇都宮名物の餃子をもチーフにしたこのジャージは、東京を拠点に活動する著名デザイナー鈴木直之さんがデザインを担当。鈴木さんは1991年に宮師雄一さんとともにタイクーングラフィックスを設立した元代表で、現在は株式会社ダイアグラムの代表を務めている。

この特別ジャージは鈴木さんがデザイン協力を始めて今年で3年目。さらに2025年シーズンはチームのレギュラージャージやブリッツェンラヴァーズのジャージも手掛けており、その斬新で美しいグラフィックはチームの個性と地元愛を見事に表現している。

特に注目すべきは、鈴木さんが考案したちよつとかわい餃子ロゴだ。シンプルながら愛らしいこのデザインは選手やファンに親しまれ、チームの象徴として確立されている。鈴木さんの長年にわたる多彩なクリエイティブ経験が生かされたビジュアルは、宇都宮ブリッツェンのアイデンティティの一端を担っている。

宇都宮ジャパンカップは、単なるプロレースの枠を超え、地域とスポーツが融合する場として、世界的に注目される大会だ。世界最高峰の選手たちの熱戦、地

元チームの奮闘、そして訪れるすべての人の笑顔が交錯する特別な一日を、ぜひ現地で体感していただきたい。





THE UTSUNOMIYA BLITZEN POP UP STORE RED ZONE

期 間 ➡ 9月27日(土)~10月19日(日)

会 場 ➡ 宇都宮市江野町 7-5 入 場 無 料

内 容 ➡ グッズ販売、写真展示など

私たちは宇都宮ブリッツェンを応援しています。

Astemo



Thank you for your support.

Blitzen 7